1992年 5月 1日12時41分

GRAPHIX:
HÉIQUITI HARATA

IRЯEGULARS

発信元 高杉 弾
(MHA02047)

五 十 音 標 準 テ キ ス ト 覚 え 書 き 控

絶対なんだと。とんでもなく大切な贈り物の品。なくしては大変なので是非とも届けなければ、遠いお城のお姫様に。人間誰しもやる
* 気になればできぬことなどありはせぬ。盗む奴がいればこの俺がたたっ斬ってやるぞ、みんな死ね。寝る間も惜しんでとにかく走るこの荒れ野。のん気に煙草などふかしている場合ではないぞ、すでに三本も抜けてしまった
04 歯。早くも小田原まで走ったきょうこの日。一人で食べるおかずは豆腐。蒲団の中でたっぷり休み、スケベな夢を見てどへへへへ。平気です平気です、なにしろ僕は有名な阿呆。ほとんど無意味な妄想にとりつかれている今。
* まあ何とかなるさと悲しい境遇が胸にしみ。身から出た錆びとはまさにこのことだと己を恨む。むりやり見開く疲れた目。面倒臭いなどと言ってはいけないと知りつつも。もう朝だぞ新聞屋。矢も盾もたまらずぶちまけるヤ
05 カンの湯。夕刊は夕方配るものだろうが、新聞屋さんよ。夜になってから朝刊を持ってきてどうするの、ほらほらほら。ラリッてるんじゃないのアンタ、いつもラリッてばかり。利口なのか馬鹿なのか、よくわからないアン
* タはいつもラリッてばかりいる。留守番電話にでも入れておいてくれなきゃ困るじゃないか、早くしてくれ。連絡ぐらいちゃんとしろ。労働というのは大切なものだけど、アタシなんだかもう眠いわ。わからないわからない、
06 アタシもう何が何やらさっぱりわからない、いやいやいやん。(最初に戻る)

răsturnaţi

NIFTY-Serve　ＦＡＸ配信サービス　　羽良多様

CLUB

TEXT:
DAN TAQUASUGUI

倶　楽　部　イ　レ　ギ　ュ　ラ　ー　ズ　　第 8 回

朝、目が醒めると、僕はもう何が何やらさっぱりわからない。犬も歩けば棒に当たると言い、郷に入りては郷に従えとも言い、脳ある鷹は爪をかくすとも言う。美しい花は心の支え、松葉杖は歩行の支え、巨万の富は生活の支え。絵にかいた餅ではなく、常に本物の現金が欲しい欲しいと願う愚かなる自分の顔。男の欲望って、なんて罪深いものなんでしょうか。かつて僕の友人が言いました「君の人生は所詮キミだけの高杉式」。「君のことは君自身で決めるしかない」とかなんとか言われても、僕にとってはそれがいったい何のことやらわからず、結局のところ明日は明日の風が吹く。くだらない冗談は休み休み言って欲しいものだが、しかし肝心なことは人に聞け。けれどもしかし、だからと言って、そんな僕でさえ時には踊るよフラメンコ。子供の頃から大好きなのさ。逆さになって死ぬほど踊ったりしたこともあるし。尻に穴があくほど踊ったりしたこともある間抜けな僕です私です。すっかり馬鹿になってしまった僕は、それでもすぐに目を覚まし、蒲団から飛び起きて「こらこら俺の邪魔をするな、そこを通せ！」。世界はほとんどすべてみんな嘘。空には満天の星、野には一面に美しい花が咲き乱れていました。ただしそれらはみんな僕の幻想そして妄想、すなわち人生の迷いと過去のあやまち。ちんぽを丸出しにして僕はいつまでも君を待つ。つらいことや悲しいことがあっても、僕は君にすべてを捧げるよ、そう、僕のすべて。天から下された使命を僕は信じている、それは

Nu

Q^2脱出男他人のQ^2漫遊記

松沢呉一

vol.17

四月一日(水)

　某代理店が出している企業向けビデオ・マガジンがホーミーの取材にやってきて、豪徳寺の境内で撮影。うちに迎えに来た制作会社のディレクターは私の名を「松山」と間違え、近江商法会をマルチ商法の会とでも思ったか、「近江商法会は何か商売をやっているんですか」などと尋ねてくる。豪徳寺に先に着いていたプロデューサーは、私をスタッフと勘違いして「ホーミーの先生(私のこと)はまだ?」などと訊くし、先日打合せに来た代理店の人も「近衛商法会」と繰り返し言っていた。

　いくら雑誌に書きまくり、衛星放送やＦＭで喋っても、そんなものを見たり聴いたりしてる人って極僅かなのだろうと実感。よくある話ではあるが、これほどの集中打はそうあることではない。近江商法会をもっと知名度と社会的影響力がある秘密結社にしなくてはいかんとの思いがフツフツと湧く。

四月二日(木)

　新宿伊勢丹の古書市へ。十年振りに本漁りが復活、月に一、二回は古本市に行き、週に一、二回は古本屋に顔を出している。今日も勢い付いて神田へ足を延ばし、福富織部著『屁』(昭和二年刊)を発見。屁の参考になる大変いい本。著者はこのあと『褌(ふんどし)』という本を出していて、これも褌の参考のために手に入れたいものである。

四月七日(火)

　歯医者で寝る。ここ半月ばかり歯医者に通っているのだが、歯を削る不快感から逃げるために瞑想状態に入ろうとして毎度寝てしまう。歯を削られている最中に寝るとは、相当の強者と思われていることだろう。この間、床屋に行って、つい歯医者の癖で口を開けてしまい、相当の強者と思われたしな。

四月十日(金)

　雨が続く。松濤で、犬にビニールをかぶせて散歩しているオバハンを見る。アホかいなと、せせら笑うが、この間のレニングラードの原発事故を恐れてかもしれないとも思う。そのオバハン自身、頭からすっぽりコートをかぶった上に傘をさしているのだ。

　日本ではたいした問題になっていないこの事故だが、ヨーロッパでは大きく報じられており、フィンランドでセシウムの値が高くなっているとの報道も為されている。

　反原発は貧乏人の専売特許の感もあるが、金持ち連中は情報をいち早く入手して自分を守ることだけはしっかりやっている。先日、この近くの大邸宅に無農薬野菜の箱が積んであるのを目撃したように、手を汚さないまま、彼らは無農薬野菜の恩恵も受けているのだ。

　金持ちは生き延びる。金持ちに飼われた犬は生き延びる。雨に濡れても小便飲んでる私は生き延びる。

四月十二日(日)

　エコー・ユナイトの坂本君の友達で、Q^2で知り合った家出女子高生が家に転がり込んで来たのがいる。友達三人と一緒に家出、それぞれQ^2で知り合った男の家に居候しており、その家に飽きるとまたQ^2で新しい宿を探すのだそうだ。Q^2の登場で、家出も手軽な時代となった。

　だが、「じょしこぉせぇ」の響きに騙されてはいけない。こいつら、家出先でも月に何万もQ^2をやり、家に帰ったら四人の家出娘が集まって騒いでたりすることもあり、坂本君の友人は地獄だと言っているらしい。

　でも、じょしこぉせぇ四人に囲まれれば、やっぱり天国のように思えるのは気のせいか。

四月十九日(日)

　のんびりテレビを観る。ＴＢＳの「報道特集」で、アジア人の超過滞在問題をやっている。いつもながらの念入りな取材と、それに裏打ちされた明確な姿勢には感心。ＴＢＳはどうせ何をやっても失敗続きなのだから、一日中報道特集をやっていればいいのに。

四月二十日(月)

　6月16日に下北沢タウンホールでやる近江商法会のイベントの打合せ。タイトルは「発足1周年記念秘密会議」にする。そうか、もう一年か。早いものだ。この一年、いろんなことがあった。たくさん原稿書いたし、衛星放送やＦＭで随分喋ったなあ。極僅かしか見たり聞いたりしてないんだけども。

四月二十一日(火)

　久々に帰国した在米の友人に会う。彼の知合いの脚本家がエイズについて調べたら、エイズは細菌兵器の実験によって洩れ出したものので、その背後にはＣＩＡがおり、さらには60年代のドラッグ・カルチャーも操作された陰謀であったということが判明、現在映画化のために動いているという。

　エイズ生物兵器説は以前からあり、真偽はまだわからぬが、アフリカミドリザルから広がったというものよりも、人為的に作られたと考えた方が理に叶っている部分が多い。

　またティモシー・リアリーがＣＩＡと関わっていて、ＬＳＤの実験も国のためにやって

いたとの説もあるらしい。

四月二十三日(木)

ティモシー・リアリーと親交のある人物にCIAとの関係について話すが、「そんなハズがない」と強く否定。どうしてそれほど弁護するのかと思ったが、「CIAがあんないい加減な男と組むわけがない。そういう噂があるとすれば、自分で流しているんじゃないか」という。あらら。

CIAに追われてアフガニスタンで捕まったという話も嘘だと自分で言っていたそうで、本当の話を嘘だと言っているのか、もともと嘘なのかわからないが、そういうわけのわからんことを言うオヤジらしい。

それをわかっていれば面白いオジサンだとのことだが、欧米コンプレックスの強い連中が日本で有難がっているのと、本国での評価は全く違う。ティモシー・リアリーがクイズ番組の回答者で出ているビデオを持っている人がいて、なんだか日本とイメージが違うぞと思っていたが、実体はこんなもんだ。

気取った、しかし内容のない文章で紹介されてきたティモシー・リアリーに興味が抱けなかったが、なんだか急に好きになってきた。

四月二十四日(金)

数日前、編集者Gに女子高生居候話をして以来Gの様子がヘンだ。「Q^2に30万は投資しているのに、何故うちには女子高生がいないのか」とGは怒り、それからというもの女子高生を見る度、「こういう女がQ^2してるのか」との妄想が広がり、女子高生と一発やらずにはいられなくなってしまったのだ。

Gはスポーツ新聞を見て、あちこちのホテルに「女子高生はいませんか」と電話しまくったが、女子高生売春をやっているところはない。原点に帰って今朝の5時から4時間に渡りQ^2をやったが、そんな時間に女子高生が電話してるはずがない。

Gは、このままでは収まらんと、スポーツ紙で女子高生専門の女性斡旋業者を見つけ、吉祥寺に行った。入会金五千円、紹介料五千円、本人に五千円払って、あとは話次第というもの。女子高生を選んで喫茶店に行き、いよいよ一発と思ったら、用事があると帰ってしまったそうだ。しかも帰り際に「こずかいもっとちょうだいよ」とせびられ、もちろんこれは払わなかったが、茶を飲んだだけで一万五千円。Q^2代を入れると一日で四万円の出費。

そのあとは見る女子高生がすべて金のことにしか頭のないバカ女に見えるとのこと。バカはどっちかという問題は置いておくとして、古本に金を回すためにQ^2をしなくなってしまった私としては、Gがどこまで走り続けるのかに注目している。走れ、G!

四月二十八日(火)

マルタ君の取材につきあって、オーストリア在住のロシア人ヴォーカリスト、サイーンホさんに会う。彼女の歌は、タミア、ディアマンダ・ギャラス、メレディス・モンクなどを思わせたりもするが(特にディアマンダから影響されたのではないかという部分が散見できる)、常に柔らかさに満ちている。それが彼女の際だった個性であり、その個性は民族性に根ざしたものだろう。

トゥヴァ出身とあってホーミーもやるが、倍音は大きくない。他の声に影響が出るため、あまりやらないようにしているらしい。

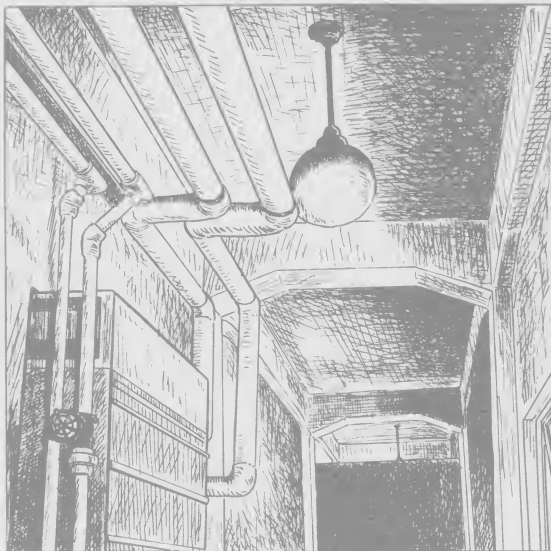
私がホーミーを聞かせると、サイーンホさんが音を合わせてくる。マルタ君も聞かせたあと、サイーンホさんは「日本でこれだけ出せる人達がいるとは驚いた。90%はできている」と言うが、社交辞令にもほどがある。

四月三〇日(木)

先日、さるすべり中野君に聞いたポパイ週刊化第1号掲載のドクター中松インタビューを見る。ひでえ内容。25歳までのセックスやオナニーは頭を悪くすると言っているのだ。セックスはともかくオナニーを侮辱するとは私の存在を否定されたも同じ、シティロードの連載「オナニーとミュージシャン」を一時中断して、急遽「オナニーとドクター中松」を三回ほど書くことにする。いかなるハッタリ男であるかについても暴露してやろう。

夜、宅八郎に会い、今回の事件についての話を聞く。宅と宅を裏切った宮沢雪絵という女性と、いずれの主張が本当でもいいんだが、小峯の責任を全く問わずに一方的に宅を叩く週刊ポスト姿勢は疑問だ。同じ一ツ橋グループとして、小峯を守ろうとの意図があったと思われても仕方ありまい。宅よ、ポスト編集部の前にもウンコしたれや。

お詫びと訂正：前号3月26日付「知久君も、ツノゼミが産卵すると言われている種類以外の木で産卵しているのを見つけ」との表記は間違いでした。「産卵しているのを見つけ」を「幼虫がいたのを見つけ」と訂正し、知久氏、およびツノゼミ関係者にお詫びします。

illustration by Kazu Yuzuki

それをもうひとひねりして、これは光の映画だ、ぐらいのことはいうだろう。

もちろん、それが間違っているというわけではないが、間違い以上に問題なのは、そういうテーマ主義的な把握（焦雄屛は違うが）が、映画をスタティックに規定するのと裏腹に、そこに溢れる光そのものの豊かな質感を、見るものから遠ざけてしまうという点である。実際、スーが、押入れのなかで懐中電灯をつけて本を読んだり、もっと後のほうで、それで壁に張りつけた日本人の少女の写真を見るシーンは、それ自体でいいのだが、その良さは、光の映画云々などという言葉が出てくるはるか以前で、端的に懐中電灯のやや赤味を帯びた光そのものが、なんともいえない温もりと親密な空気をかもし出しているからなのだ。しかも、この映画の光の良さは、決してそのようなところだけではない。

たとえば、スーたちの教室にさしこむ午後の光、あるいは保険質にさしこむ光、それらすべてが素晴らしい。いや、もっと単純に、スーが心を寄せ、やがて殺してしまうことになる少女のミンが、夜道を歩いていって明かりの溢れる家に入っていく、たったそれだけのシーンでさえ、ああ、これが映画だったのだと、胸がジンとなるような思いがするのだが、そんななかで、とりわけて凄いのは、スーがミンを連れて撮影所のステージに入っていく場面だ。

真っ暗ななかで、扉の軋る音とともに、画面奥から外の光が弱くさしこみ、そこに二人の姿が現れる（つまり、キャメラは真っ暗なステージのなかから扉の方に向けて据えられているのだ）。開いた扉から射す外のひかりは、わずかにステージの床を明るくするだけで、言葉を交わしながら入ってきた二人は、すぐに薄闇に包まれて顔の表情も定かには見えない。そんななかで、ミンがふと思い立ったように、床に置かれた棒か何かの上を、手を広げてバランスを取りながら渡っていく。その、左から右へと動いていく少女の白いブラウスの袖が、かすかな光を受けて浮き立つ……その一部始終をキャメラは微動だにしないでとらえ続けるのだが、映画とは、これほどまでに繊細に光を呼吸するものであるということ、それだけで、わたしにはもはやいうべき言葉はない。

いや、凄いといえば、軍人村のグループが仕返しの襲撃を受ける雨の夜のシーンも凄いのだ。これもまた、キャメラはビリヤード場の奥にあって、停電で闇に沈んだビリヤード台ごしに、街灯か何かでぼんやり明るい通りを写し出しているのだが、その激しい雨のなかを人力車が三台、音もなく止まるのだ。そこから、雨合羽に身を包んだ男たちが次々と降りてきて、日本刀を抜きはなって、やがて惨劇が始まるのだが、その、画面の奥の薄明るい通りを人力車がやってくるショットが素晴らしい。つまり、この映画では、画面奥に扉なり入口なりがあり、そこに光が射していると、必ず何かが起こるのだ。

これは、エドワード・ヤンの光や闇の扱い方からもきていることだが、同時に彼の空間把握の問題でもあるだろう。それが素晴らしいのだ。まあ、これについても書き出すとキリがないから、とりあえず簡単にいうが、たとえば主人公のスーの一家が住んでいる日本家屋。玄関から入ったとっつきが板の間で、その右手に便所があり、左手に押入があって、スーとその兄が、その上下に寝ている。そして、便所の奥に食堂があり、その、さらに奥が台所になっている……といった間取りで、これが劇の進行のなかで、人のさまざまな動きに伴って明らかになっていくのだが、それをするキャメラの位置と動きの、的確というよりはもっとスリリングなあり方。同じことは、学校の教室とその回りの回廊ふうの廊下や中庭についても、また、そこだけは独立したもう一つの空間であるような保険室についてもいえるのだが、こんなふうに書くと、それに伴うそれぞれのシーンの記憶がわらわらと迫ってきて、とても言葉が追いつかない。だから、あと一つだけいって、もう止めにしよう。

その一つとは、主人公のスーやミンを初め、スーにからんでくる不良のズルにしても、プレスリーをうたいたいのに、お前の声ではコニー・フランシスだといわれるシャオマオにしても、少年たちが実にいいのだ。物語の時間は一九六〇年だが、彼らは、ほかならぬ現在を生きており、それをエドワード・ヤンが、いまこの輝きを逃すまいとして撮っている、それがいい。ただ一つ残念なのはオリジナル版が四時間なのに、日本公開版は一時間近く短くなっていることである（松田政男が『シティロード』で、長すぎるなどと書いているが、それは、かかる少年たちの生の時間を共有し得ない老人の繰り言にすぎない）。いずれにせよ、いま、これを見なかったら、もう映画を見るのは止めたほうがいい。

月刊「ガロ」創刊30周年記念出版
水木しげる叢書
第1期 貸本作品篇全10巻
完全限定版
第一巻 忍法秘話傑作選
忍者無芸帳、忍者は一度勝負する、怪忍、太郎稲荷、ハト、未完成交響曲、ろくでなし
第二巻 黒のマガジン傑作集Ⅰ
約束、水晶球の世界、安い家、鉛
第三巻 黒のマガジン傑作集Ⅱ
不死鳥を飼う男、猫又
第四巻 劇画No.1傑作集
群衆の中に、手袋の怪、大人物、壁
第五巻 劇画マガジン傑作選
伊四一潜の最期、太郎岩、水妖鬼
第六巻 恐怖マガジン傑作選
サイボーグ、髪
第七巻 スポーツマン 宮本武蔵
第八巻 ヘビーZ 水人間現わる
火星人がやってきた
第九巻 プラスチックマン
プラスチックボーイ
第十巻 恐怖の遊星魔人
●全巻評論 呉智英、権藤晋、四方田犬彦
●全巻解説 伊藤 徹
●完全限定1,000部、各巻番号入
●B6判上製函入、各巻平約140頁
●頒価3,800円
■全巻完全予約制(予約特典付)
■92年7月から刊行開始
(3ヵ月に一巻順次刊行予定)
●責任編集 かこめしゃ
●編集協力 ㈱ツァイト
●発行 ㈱青林堂
◆水木しげる叢書・予約方法◆
封書に住所・氏名・電話番号、「水木しげる叢書全巻予約」の旨お書きになり、62円切手を同封の上、〒151 東京都渋谷区初台1-47-1 小田急西新宿ビル4F ㈱Zeit出版部 までお申し込み下さい。内容パンフレットと予約用紙を発送いたします。
※この「水木しげる叢書」は限定版ですので、一般書店では販売致しません